

つれづれなるまゝに、日ぐらし硯にむかひて、心にうつりゆく
よしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそも
のぐるほしけれ。いひやこの世に生れては、ねがはしかるべきこ
とこそ多かれ。みかじの御位はいともかしこし。竹の園生のす
ゑばまで、人間の種ならぬをやんごとなま。一の人の御ありさ
まはさらなり、たゞ人も舍人などたまはるまははゆつしと見ゆ
。そのこうまごまでははふれにたれど、なほなまめかし。それより
てつ方は、ほじにつけつゝ時にあひ、したり顔なるも、みづか
らはいみじと思ふらぬといと口をし。法師ばかりうらやましか
らぬものはあらじ。「人にはホのはしのやうに思はるゝよ」と
清少納言を書けるも、げにさることぞかし。いまほひまうにの
ゝしりたるにつけて、いみじとは見えぬ。増賀ひじりのいひけむ
やうに、各甫ぐるしく、佛の御をしへにたがふらむとを覺ゆる
。ひたぶるの世すて人は、なかなかあらまほしきかたもありなむ
。人はかたちありさまの勝れたらむこそあらまほしかるべけれ。
ものうちいひたる聞きにくからず、あいぎやうありて詞多から
ぬこそあかすむかはまほしけれ。めでたしと見る人の心おとりせ
らるゝ、本性見えむこそ口をしかるべけれ。しなかたちこそ生
れつきたらぬ、心はなどかかしこまよりかしこまにもうつさばう
つらごらむ。かたち心づまよき人も、ぜえなくなりぬれば、しな
くたり、顔にくさげなる人にも立ちまじりて、かけずけおさる
ゝこれほいなまわがなれ。ありたまことは、まことしま文の道、
作文、和歌、管絃の道、また有職に公事のあた、人のかぐみ